

サウンドフェスタ 2006

業務用音響市場について考える

平成 18 年 6 月 6 日(火曜日)、7 日(水曜日) 10:30 12:30

グランキューブ大阪(大阪国際会議場) 5 階 メインホール

● パネラー(順不同)

森本浪花音響計画(有)	代表取締役	森本 雅記 氏
(株)アキト	取締役	三村 美照 氏
(株)イーブイアイオーディオジャパン	東京営業部 課長	大森 健市 氏
(株)日本エムエスアイ	代表取締役	藤井 修三 氏
日本ビクター(株)	SI センター 部長	東出 孝史 氏
パナソニック SS マーケティング(株)	RAMSA 推進チーム チームリーダー	平井 智勇 氏
ボーズ(株)	プロダクトマネージメント部 課長代理	重金 満 氏
ヤマハ(株)	CA 営業部 マネージャー	荒井 光治 氏

● セッションの目的

業務用音響市場の現状と業務用音響市場の展望を探る

今回のセッションは、業務用音響市場の現状を分析しながら将来の展望を見つめることを目的としている。公共ホールを始めとしたハコモノ行政に関連する業務用音響市場に活気が見られない反面、ネットワークを使用した会議室、遠隔授業といった分野は次第に伸びてきている。それでも欧米から言わせると日本のネットワークビジネスの拡張は遅すぎる。

日本電子機械工業会の集計によれば、2001 年度の工場出荷価格はローインピーダンス関連製品が 410 億円、ハイインピーダンス関連製品が 390 億円となっており、2004 年度においても大きな変化が見られない。この数字は日本電子機械工業会に加盟している会社のみの数値であるが、業務用音響市場で活躍している輸入製品の入荷価格はおおむね 200 億円と推測しているが、その実態は全く不明である。

正確な集計データが無いというのが現在の業務用音響市場の置かれている現状ではあるが、「業務用音響市場がどのように変化をしていくのか？」についてコンサートサウンド、業務用音響機器施工会社、業務用音響機器製造会社、業務用音響機器輸入会社、設備設計会社の方々にお集まりいただき、それぞれの立場から「現状の問題点」、「将来の展望」を語っていただこうと思う。

- セッションの内容

1. 業務用音響市場とは

 <p>TELEX 資料より</p>	<p>音響機器を営業ならびに運営のために使用する市場で、音響機器を個人の趣味のために使用する民生市場を除く全てをいう。プロオーディオ(放送局、スタジオ)、プロサウンド(ホール、コンサート)、ミュージックサウンド(クラブ)、コマーシャルサウンド(学校、体育施設、交通機関)、シネマサウンド(映画館)、インダストリアルサウンド(工場、発電所、物流施設)</p>
---	--

2. 業務用音響市場の実態と反省

日本電子機械工業会の集計によると、2001年度と2004年度の業務用音響に属する製品の出荷ベースの数字に変化がない。同じ大きさの器の中で仕事の取り合いをしている。

しかしながら、業務用音響市場を客観的に分析できる調査がなされたことはない。われわれは手探りの中で現状の評価と将来の見通しを語ろうとしている。業務用音響市場の将来性がどのくらいあるのかという夢を語るができない。

音響設備を固定して使用する分野と、音響設備を仮設して使用する分野がある。

人間の思いや、芸術性を音で伝達する「情緒伝送系」と、音で情報を伝達する「情報伝送系」に分類できるが、日本では「情報伝送系」の市場が未発達に終わっている。

音響の世界で通用している用語ならびに単位の統一性がなく、同じ現場で働く他の市場の人間とのコミュニケーションが図れない。エネルギー量を表す単位と、レベルを表す単位が混在している。音響機器の共通測定基準がないため、基本設計をおこなう際に性能の比較ができず、価格だけが先走っていく(悪化が良貨を駆逐する)。

3. 業務用音響市場の見通し

ハコモノ行政は景気が回復したとしても以前と同じ規模になるとは思えない、その上今まで音響市場に参加していなかった通信会社が参入してきている。

指定管理者制度でも今まで現場を経験していた音響や照明専門家がいるということだけでは通じない異変が起きている。

施設の市場評価、資産価値を維持するための施設管理技術の確立をおこない、定期的な改修計画立案をしていく必要がある。

4. 業務用音響市場の拡大を図るには

市場の認識(売上規模、活動人員、給与水準等)

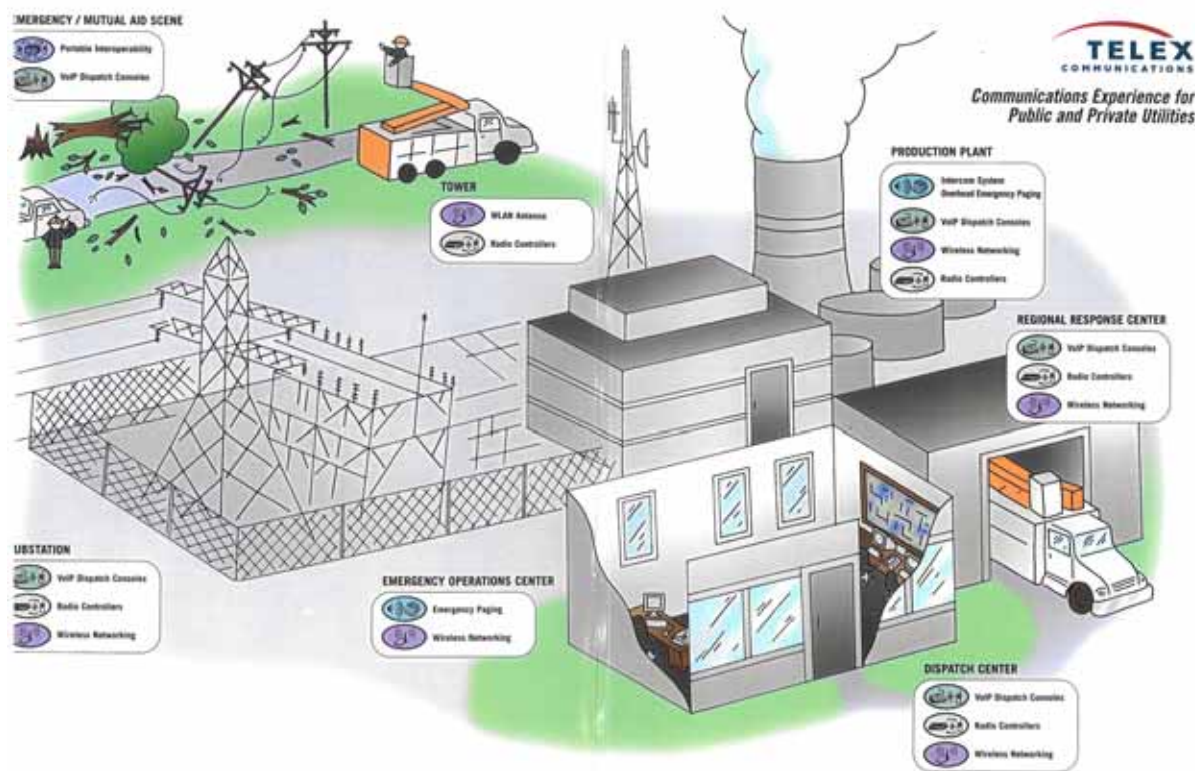
音響機器だけで問題解決を図ろうとせず建築音響との共同作業が必要。

業務用として使用するというは必ず対価(使用料等)が発生する。資産償却、定期的保守点検、定期的更新をおこない資産価値維持を図る必要がある。

音響設備を施主の希望通りに動作させ、運用するための手法の見直し(アサイン、コンフィギュレーション、チューニング)をおこなう必要がある。

未開拓分野の掘り起こし。

- シーリングシステムには無限の可能性が秘められている(目的別製品開発、使用数量の適正化、ネットワークビジネスとの連携)
- 新しい市場の調査研究(マスキングノイズ・システム、ページング・システム、インターカム・システム、産業分野の音響設備)



- デジタル機器並びにデジタル伝送への対応

資格制度(PA技能検定、音響調整士、劣化診断士)の確立。